

歴史の光と陰の巻

歴史の町、京都、なぜそこに修学旅行に行くのかといえば、「そこが日本の中心地として一番長く存在していた町であるから」ということができるでしょう。今でこそ日本の中心は東京ですが、明治維新で東京遷都してから 150 年余り。一方、京都は 1200 年以上の長きにわたって都として日本の中心だったわけです。平安の雅な時代から、江戸時代の幕が下りるまでの間の歴史



があちこちに残されていて、その伝統・由緒ある姿をとどめています。絢爛豪華な鹿苑寺金閣、渋く落ち着いた風情の慈照寺銀閣、広大で豪華な二の丸御殿の二条城など、そのきらびやかさや、贅を尽くした姿は、京都の歴史の華麗な一面を示しているといえるでしょう。

この華麗できらびやかな部分を光とするならば、これとは対照的な、歴史の陰の暗い部分が存在していることも、京都の歴史の厚みを示すものです。戦国の時代、各地から蜂起した大名がこぞって“天下”を取るために、京をめざし、血なまぐさい戦いも重ねられました。

そのなかの一つに、伏見桃山城の攻防がありました。天下分け目の関ヶ原合戦の折り、徳川家康の家臣であった鳥居元忠の率いる軍勢は、伏見桃山城を守って立てこもっていましたが、石田三成の軍に攻め落とされ、四百人あまりが討たれ、自刃するという惨劇が起きたのです。落城のとき、城内の床は武士達の



血で真っ赤に染まったそうです。その後、取り壊された伏見桃山城の遺構の一部は、武士達の無念の思いを弔うべく、養源院・正伝寺・源光庵・宝泉院、御香宮神社の表門や豊国神社の唐門など、京都一円の寺社などに移築されました。血に染まった床板は天井の板として使われ、「血天井」と呼ばれています。四百年の時を経て、今ではどす黒い色に変わっていますが、手のひらのあとや顔の一部と思われるあとが残っており、陰惨な歴史の一面を垣間見ることができます。

また、江戸から明治へと歴史が大きく移っていくなか、志半ばで刃に倒れた人物もいました。かの有名な坂本龍馬です。幕末の混乱期、四条河原町にあった近江屋の二階で同志中岡慎太郎とともに暗殺されました。享年 33 歳、日本で初めての株式会社である「亀山社中」、そして、海軍であり商社でもあった「海援隊」を作り、世界の中の日本という視点で活躍した偉人は今、東山の小高い丘の上から歴史の行く末を見守っています。



